

令和 6 年 6 月 17 日現在

機関番号：31302

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00890

研究課題名（和文）英語の名詞化に着目した指導が英文読解と読解への自信に与える影響に関する研究

研究課題名（英文）Effects of nominalization instructions on reading comprehension and self-efficacy

研究代表者

吉村 富美子（YOSHIMURA, Fumiko）

東北学院大学・文学部・教授

研究者番号：80310001

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の成果としては、まず、英語圏の文献の研究によって学術英語の難解さという特徴を形成している言語的要因として接辞使用と名詞化の2つを特定したことと、接辞や名詞化を日本人大学生に教えるための効果的で具体的な指導法や練習法を探し出したことが挙げられる。次に、実験研究によって、接辞と名詞化に関わる指導を明示的に行った結果、日本人大学生の英文読解と読解への自信にプラスの影響がありうることを実証的に明らかにできたことが挙げられる。これらの研究成果は、1回の口頭発表と4つの研究論文として発表することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、学術英文読解の難しさに語彙的には接辞の使用が文法的には名詞化による情報の凝縮が貢献していることを文献研究によって明らかにしたことと、接辞と名詞化指導を明示的に行うことによって学術英文読解と読解への自信増強に有効でありうることを実証的に示すことができたことにある。次に、社会的意義としては、英語圏で広く知られている学術英語、名詞化、文法メタファー等の概念を日本に紹介し、学術英文読解の難解さと重要性を日本の大学教員と学生に知らしめ、学術英文の難しさを緩和する方法として接辞と名詞化指導が有効でありうることを示唆できたことにある。

研究成果の概要（英文）：This study's achievements include, first, the identification of affixes and nominalization as two linguistic factors that contribute to the difficulty of academic English through the study of literature from English-speaking countries, and the identification of effective and specific methods for teaching affixes and nominalization to Japanese university students. Second, the study empirically demonstrated that explicitly teaching the concepts of affixes and nominalization and giving practice on them can have a positive impact on Japanese university students' English reading comprehension and self-efficacy. The results of these studies were published in the form of one oral presentation and four research papers.

研究分野：英語教育学

キーワード：nominalization EFL reading self-efficacy academic English affixes

1. 研究開始当初の背景

本研究開始当初は、学術英語どころか英語の話し言葉と書き言葉の相違についても日本の英語教育においてはあまり認識されていなかった。一方、英語圏においては、学術英語の難しさや大切さが教員と学生の双方において認識され指導されていた。ウェブ上で academic English, academic text, academic style 等と入力すると多くの研究者、大学、大学図書館、大学ライティングセンターがこれらについて情報提供をしており、学術英語の難しさに対応する方法として名詞化・非名詞化言い換えの練習問題などが提供されていたが、日本では名詞化や非名詞化という用語も、名詞化を含む文法メタファー (grammatical metaphor) という概念も、これらが読解にどのような影響を与えるのかもほとんど知られていなかった。そこで、学術英語の難解さの主要な言語的要因である名詞化 (nominalization) に着目した指導の効果を紹介することで、学術英語、名詞化、文法メタファーという概念を日本に紹介し、非名詞化が学術英文読解の難しさを緩和するための一つの手段になりうることを知ってもらうために本研究を計画した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、名詞化 (nominalization) に着目した指導が日本人大学生の英文読解 (EFL reading) と読解への自信 (self-efficacy) に与える効果を検証することであった。

3. 研究の方法

本研究の前半は、学術英文の難解さの言語的要因の特定のために文献研究を行った。そして、英語圏の学術書や学術雑誌、ウェブ情報の研究から、学術英文の難解さの語彙的要因として接辞 (affixes) (e.g., Gillett, 2021) を、情報の凝縮や抽象化といった特徴を創り出している文法的要因として名詞化 (nominalization) (e.g., Halliday, 2004) を特定した。さらに、英語圏においてこれらがどのように教えられているのかを調べるために、ウェブ検索を行い、英語圏における具体的な指導法を特定した。そして、日本人大学生に指導するための指導法・練習法として、(1) 名詞化練習、(2) 非名詞化練習、(3) 接頭辞・接尾辞の形式と意味の指導、(4) 名詞化を使った Theme-rheme 構造の説明、(5) Zigzag 法による文章展開法の説明の5つを選定した。これらを日本人向けに応用して、指導の手順と練習問題作成などを行った。

本研究の後半は、上記の選定した5つの指導法の効果を検証するための実験を行った。まず、2020年には上記の5つの指導を授業中に行い、その前後で読解力を調べるための読解テスト (pre-test & post-test) と学術英文読解への自信 (self-efficacy) (Bandura, 2006) を調べるための質問紙に答えてもらい、その変化を計測した。2021年には、名詞化に関わる指導を行わないで、その前後に2020年と同じ読解テストを行い、点数の変化を調べた。このようにして、2020年のグループを実験グループとし、2021年のグループを統制グループとして授業前後の変化を比較した。2021年の実験は、2020年に用いた読解テストの pre-test と post-test の等質性を検証するためにも使われた。さらに、2023年には、上記の指導から接頭辞・接尾辞の形式と意味の指導を除き、名詞化のみの指導が読解と読解への自信に与える影響を検証した。

4. 研究成果

本研究の前半に行った文献研究の成果としては、まず、学術英文の難解さに貢献している言語的要因を特定できたことが挙げられる。学術英文の難解さに貢献している語彙的要因として接辞を、情報の凝縮や抽象化といった特徴を創り出している文法的要因として名詞化を特定した。次に、ウェブ検索によって、英語圏においてこれらが具体的にどのように教えられているのかの指導法や練習問題等を見つけた (e.g., Cameron, 2001; Cooper, 2010; de Oliveira, 2010, Gillett, 2021; Hitchcock, 2010)、これらを応用して日本でも使えるような指導法や練習法を作成できたことも本研究の成果といえる。この内容は、「なぜアカデミックイングリッシュを学ぶべきなのか」(2022)、「アカデミックイングリッシュの学習法」(2023)、「Searching for promising academic English instruction methods」(2024)の3つの論文にまとめた。

本研究の後半に行った実験研究の成果としては、学術英文の難解さに貢献している名詞化や接辞を明示的に指導することが学術英文の読解 (reading comprehension) や読解への自信 (self-efficacy) にプラスの影響を与えうることを実証的に示すことができたことである。この実験の概要は、「Effectiveness of academic English instruction on EFL academic reading comprehension and self-efficacy」(2024)という論文にまとめた。

(1) アカデミックイングリッシュの特徴

学術英語の難解さは、主に専門性 (technicality)、情報の凝縮 (density)、複雑さ (complexity)、抽象性 (abstraction)、無機質さ (impersonal tone) の5つの特徴から来ている。このうち、専門性と語彙的複雑さは接辞の使用という語彙的要因によって、情報の凝縮、文法的複雑さ、抽象性、無機質さは名詞化という文法的要因によって引き起こされる。従って、理論上は学術英文の読解力を向上させるには接辞と名詞化の指導が不可欠であるといえる。

(2) アカデミックイングリッシュの指導法・練習法

学術英語の指導法や練習法は、学術論文や学術書に加えて英語圏の大学等が提供しているウェブサイトなどから学べるが、具体的には、(1)接頭辞・接尾辞の学習(e.g., Gillett, 2021)、(2)非名詞化言い換え、(3)名詞化言い換え、(4)名詞化を含む Theme-Rheme 構造の学習、(e.g., (1)-(4) from Cameron, 2001; Cooper, 2010; Hitchcock, 2010)、さらには、(5) 文章中における名詞化を含む Zigzag 法(e.g., de Oliveira, 2010)の学習の5つは、英語圏において一般的に指導されていて有効であると考えられる。

(3) アカデミックイングリッシュの指導の効果についての実験結果

上記の(1)-(5)の指導を行い、その前後に読解テストと学術英文読解についての自信(self-efficacy)調査を行った結果、名詞化に関わる指導を行ったグループは、名詞化に関わる指導を行わなかったグループに比べて、読解テストにおいて事後の成績から事前の成績を引いた数値が高かった。特に主題に関する問題と名詞化表現を具体的に説明する問題(unpacking)においては有意に数値が伸びていたことから、上記の指導は学生の英文読解にプラスの影響があったということが示された。学術英文読解に対する自信(self-efficacy)については、指導後の点数が指導前の数値より全体の平均と個々の項目において多くの数値が向上していたことが示された。この結果は、上記の指導の有効性を示している。

参考文献

- Bandura, A. (2006). Guide for constructing self-efficacy scales. In T. Urdan & F. Pajares (Eds.), *Self-efficacy beliefs of adolescents* (pp. 307-337). Charlotte, NC: Information Age Publishing.
- Cameron, J. S. (2011). *Comprehend to comprehension: Teaching nominalization to secondary ELD teachers*. M. A. thesis, University of California, Davis. ProQuest LLC.
Retrieved from <https://www.proquest.com/docview/897922386?pq-origsite=gscholar&fromopenview=true&sourcetype=Dissertations%20%20Theses>
- Cooper, J. (2010). Nominalization. E-EAP Project. Queen Mary, University of London.
Retrieved from <http://aeo.sllf.qmul.ac.uk/Files/Nominalization/Nom%20LOC.html>, accessed on October 24, 2018.
- de Oliveira, L. (2010). Nouns in history: Packaging information, expanding explanations, and structuring reasoning. *The History Teacher*, 43(2), 191-203.
- Gillett, A. (2021). Using English for academic purposes for students in higher education.
Retrieved from <http://www.uefap.com/writing/writfram.htm>
- Halliday, M. A. K. (2004). *The language of science*. Edited by J.J. Webster. New York: Continuum.
- Hitchcock, R. (2010). Week 6 Improving your academic style. Grammar and academic style for EAP (English for Academic Purpose). Retrieved from <http://humbox.ac.uk/1526/>.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 Fumiko Yoshimura	4. 巻 48
2. 論文標題 Searching for promising academic English instruction methods.	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Journal of Institute for Research in English Language and Literature	6. 最初と最後の頁 21, 42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Fumiko Yoshimura	4. 巻 107
2. 論文標題 Effectiveness of academic English instruction on EFL academic reading comprehension and self-efficacy	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Tohoku Gakuin University Review: Essays and Studies in English Language and Literature	6. 最初と最後の頁 129, 151
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 吉村富美子	4. 巻 106
2. 論文標題 アカデミックイングリッシュの学習法	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 東北学院大学論集（英語英文学）	6. 最初と最後の頁 1, 32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 吉村富美子	4. 巻 105
2. 論文標題 なぜアカデミックイングリッシュを学ぶべきなのか	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東北学院大学論集（英語英文学）	6. 最初と最後の頁 1, 22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Fumiko Yoshimura
2. 発表標題 Effectiveness of academic English instruction on EFL academic reading and self-efficacy
3. 学会等名 JALT 2023 International Conference (国際学会)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------